

書 評

集約放牧マニュアル

岡本 明治

帯広畜産大学 草地学講座 助教授

都会の人間が農業や酪農に魅力を感じる点は、自然の中で自然のリズムと共に生活し糧を得ることの可能性にある。そのような人たちがイメージする農業形態は企業的規模の農場ではなく自然と一体となった経営であろう。農業に携わっている人が何のために自分が農業という仕事を選択したのか、どのような経営をやりたいのかということを考える場合、結局は自分自身がどのような生き方をしたいかということになる。

近年わが国の農業に国際化の波が押し寄せ、より一層の生産コストの低減が求められている中で、多くの人が経営規模拡大による対応策を選択している。しかし、規模拡大によりパイを大きくして生産コストを下げる方法は新たに多額の投資を必要とする、それらの投資能力や雇用管理、糞尿処理問題をクリアーできる人はそういう方法を選択するのも良いであろう。

一方、現状の規模で内部的に生産コストの低減をはかる方法も一つの選択である。新たな投資を望めない人、労働時間をこれ以上増やせない人、糞尿処理のス

トレスを軽減したい人、自然と一体となった農業を行いたい人にとって土地条件さえ整えば放牧を取り入れた経営は魅力ある形態である。しかし、土地があるからといって全ての問題点が解決される訳ではない、どのように放牧を行うかが問題であり、そのような要求に応じてくれる技術者も適当な書籍もなかったというのが現実である。

本書は、そういう人にとって経営の中に放牧をどのように取り入れたら良いか、現状と導入の考え方、放牧地の利用計画や設計、施肥と維持管理、高泌乳期における放牧の仕方、併給飼料の与え方、乳肉育成牛の放牧方法、放牧経営の成功例など、放牧に関する問題点や解決方法などを斯界の知識者17名の執筆により、いろいろな角度から分かり易く解説されている。現時点でわが国における最高の放牧技術書の一つであろう。

1996年2月